

解答

□

問一 エ

問二 街育ちの「ぼく」にとって、ふかく寝かせた柄の付いた平鍬はいかにも重たそうであらう。腰を曲げて畑を耕すのはできそうにないと思ったから。

問三 1 ウ 2 イ 3 オ 4 エ 5 ア

問四 体力のおとろえている九十歳を過ぎた古老が使いこなしているのだから、力にたよっているはずはなく、何かコツがあるはずだと思ったから。

問五 鍬を引き上げるときには軽い力で済むように右手が鍬の頭近くをグリップするようにし、鍬を打ち込むときは右手を左手と同じ柄の尻に移すようにして右手にほとんど力が入っていないというように無理な力をいれないということ。

問六 鍬を自分の身体の一部のように使って丁寧な作業ができるようになったことで、機械の力まかせて大雑把な作業が目につくようになったから。

問七 ア

□

問一 おさむに兄が手加減していることをわからせるためには、今この場で兄に本気を出してもらおう必要があると思い、多少の怪我や損害は仕方がないと覚悟したから。

問二 ふすまに大きな穴があいて動揺したが、ここで止めたら、おさむのためにならないと思い直し、我慢してこのまま見守ろうと思う気持ち。

問三 イ

問四 弟に怪我をさせないように手加減していたのだが、ツバをかけられたことで頭に血がのぼり本気で弟をこらしめようという気持ちになった。

問五 おさむに兄の強さや優しさをわかってほしいと思うと同時に、負けて傷ついているおさむのプライドにも気遣いながら慰めようとする気持ち。

問六 1 ウ 2 イ 3 オ

問七 けんか相手の兄も、くやしさをぶつける相手の母もいないのでつまらなくなり、ひとりであらうじうじしていてもかたがたいと思えてきたということ。

問八 さつきまで激しくけんかしていた二人が、あつという間に仲直りしたが、おかしくもあり、うれしくもあるのだが、それ以上に兄弟が、けんかしてもすぐに仲直りできるくらい成長したことをうれしく思い感動している。

□

浅い川も深くわたれ。

解説

□ 出典は、新田穂高「楽しいぞ！ ひと昔前の暮らし方」。鍬の使い方を例に、道具を身体の一部として使いこなす楽しさについて述べた文章です。

問一 「目から鱗」が、「目から鱗が落ちる（あることをきっかけとして、急にものごとの真相がわかることの意味）」という慣用句の省略であることを確認する問題です。

問二 筆者は街に住んでいたころ郊外に畑を借りていて、そこで鍬の使い方には一応なれていました。しかし、田舎に移住したあと、ふかく寝かせた柄の付いた平鍬を使って腰を曲げて畑を耕すおばあさんを見た時には、いかにも扱いにくそうに感じて、自分には上手に使うことはできないだろうなあと思ったのです。

問三 接続語と副詞の空欄補充問題です。1は、うしろの「くで済んでいる」とのつながりから、「たいていは」を選びます。2は、「我流に比べて圧倒的に早く楽」だということを特に強調するための「なにしろ」が適切です。3は、「早く楽」という内容に「きれいに仕事ができる」をつけ加えているので、添加の「しかも」が入ります。4は、次の文の冒頭の「が」が逆接であることを考えて「それ相応の力も必要だ」となる、「それなりに」が適切です。5は、「たしかに」九十歳を過ぎたではなく、「九十歳を過ぎた古老が（たしかに）こなしている」と考えるとわかりやすいでしょう。

問四 九十歳といえは、体力は相当衰えているはずです。その老人が平鍬を使いこなしているのを見て、力ではなく、何かコツがあることに納得がいったのです。

問五 文章中から「ムダのない」に関係のある言葉を探し、「力を抜く」「重さを生かす」「軽い力」などをみつけます。これらを使って鍬を使うときの身体の動きを説明すると、「鍬を引き上げるときは軽い力で済むように」 「打ち込むときは鍬の重さを利用して力を抜いて」というように、ムダな力を使わないようにして合理的に鍬を使うことを説明できます。

問六 機械で畑を耕すのと、鍬を使って人力で耕すことの違いを想像します。機械は力強く、同じ動作を繰り返すのが基本です。人間の手作業は目や筋肉だけでなく身体感覚を総動員することができます。「道具を身体の一部とし、身体を道具の一部として使いこなす。精農は自然の内に隠された力を妨げることなく引き出すマジシャンなのだ」というのは、土の状態に合わせて丁寧な作業をすることのできる人間の能力の高さを言っているのです。

問七 「醍醐味」とは、ほんとうの面白さ、深い味わいのことです。苦勞して練習や作業を繰り返していると、楽にできるようになっていくことに気づく瞬間が来るのが、面白いということです。

問八 出典は、丘修三「兄弟」。兄弟喧嘩の場面での、兄と弟と母親の葛藤を描いています。

問一 「きっぱり」という表現から、母親の決意、決心を読み取ります。けんかはよくないことですが、ふだんから兄が手加減してくれていることがわからずに、不遜な態度をとる弟に兄の強さをわからせようと思っているのです。そのため、多少の怪我や器物の損壊は、大目に見ようと覚悟したのです。

問二 「下っ腹に力を入れて」とあるのは、ふすまに大きな穴があいたことになって、やはり動揺してしまつた母親が、どんな結果になつてもたじろがないようにしようと、もう一度強く思い直したということです。ここでけんかを止めてしまつては、弟に兄の本当の力を思い知らせることができないので、最後までやらせようと思つたのです。

問三 「お母さんもまた私と同じ考えです」。イは「さすがのお母さんでさえも顔をそむけた」という意味です。アは「お母さんもまた私と同じ考えです」。イは「さすがの弘法大師でさえも筆の誤りがある」。ウは「強調」、エは「仮定」を表しています。

問四 最初の場面で、兄は「ほんとに、手加減しないでやっていいの」と言っているのですが、自分が弟より体力的に勝っていることは自覚しています。弟の無鉄砲な攻撃に耐えながら、ほどほどの力で弟をおさえこんで勝負がついたと思つたところでツバを吐きかけられたので、その侮辱的な行為に一気に頭に血がのぼり、手加減せずに弟を思い切りたいてしまつたのです。くやしませの弟の行為が許せなかつたのです。

問五 「おさむのお兄ちゃんだもん。強いのがあたりまえじゃない」ということによつて、おさむも強いけれど、そのお兄ちゃんなんだからもっと強いのが当然だと伝えています。弟に兄の強さを理解させると同時に、負けた弟の自尊心もきざつけないように配慮した言葉になっています。

問六 擬態語、擬声語をあてはめる問題です。1は、しゃくりあげて泣くようすをたとえる「ヒクヒク」。2は、ながられたあとの痛みを表す「じんじん」。3は、ぐずぐずと泣き続けるようすをたとえる「いじいじ」が入ります。

問七 兄は二階に上がつてしまふし母親も台所に行つてしまふ、一人になつてうじうじしていても何も面白いことはありません。くやしさを、いらだちはぶつける相手がいないと、どうしようもないとわかり、だんだんつまらない気持ちになつていったのです。

問八 「おかしい」のは、さっきまで激しいけんかをして二人がすぐ仲良くしているのを見てほえましい気持ちになつたからで、「涙がこみ上げてきた」のは二人が自分たちだけで仲直りができるくらい成長していることがうれしくて感動したからです。

問九 漢字の書き取り問題です。一画ずつ、丁寧に楷書で書きましょう。句点も忘れないように。